

笑いとコミュニケーション能力との関係性について

——芸能従事者と大学生を対象とした「ユーモア・スキル」調査を中心に——

矢 島 伸 男[†]・大 崎 素 史[‡]

1. 研究の目的

学校教育における「笑い」への関心は、1994年の日本笑い学会の設立以来、徐々に高まりつつある一方、①「笑い」の技術がコミュニケーション能力（スキル）とどのような関わりを持っているのか、②「笑い」はコミュニケーション能力を向上させるか、という研究は、いまだ発展途上の段階にある。

現場レベルでは、「お笑い教師同盟」や吉本興業による小学生を対象とした漫オワークショップ[※]など、「笑い」を取り入れた教育活動が行われているが、優先すべきは「「笑い」の技術がどれほどコミュニケーション能力の向上に介入できるか」という理論研究をさらに進めていくことであると考える。

そこで、本研究では、日本で初めて芸能従事者（お笑い芸人・落語家・放送作家など、「笑い」と深い関わりのある仕事をしている者）または経験者（過去芸能活動を行っていた者）を対象とした「ユーモア・スキル」調査を行い、その結果を基に、大学生を対象とした質問紙調査から、「ユーモア・スキル」尺度を作成した。また、「ユーモア・スキル」尺度が、コミュニケーション能力とどのような関わりを持つかについて、既存する他尺度を用いて分析し、考察を行った。

2. これまでの「ユーモア・スキル」研究の成果と課題

2-1. 上野行良の「ユーモア志向」

ここでは、「ユーモア・スキル」に関する4人の先行研究を紹介し、それらの課題について述べていきたい。

上野（1992）は「ユーモア」に関する先行研究を基に、その種類を「遊戯的ユーモア」、「攻撃的ユーモア」、「支援的ユーモア」に分類している。

「遊戯的ユーモア」については、「陽気な気分、雰囲気醸し出し、自己や他者を楽しませることを動機づけとして表出されるユーモア刺激によって生起されるユーモア」とした。次に「攻撃的ユーモア」については、「他者攻撃を動機づけとして表出されるユーモア刺激によって生起されるユーモア」とした。最後に支援的ユーモアに

については、“自己や他者を励まし、勇気づけ、許し、心を落ち着けさせることを動機づけとして表出されるユーモア刺激によって引き起こされるユーモア”とした⁴。

また、上野（1993）は、「ユーモア」のストレス緩和効果を検討する上では、その分類を行うだけでなく、「ユーモア」を表出または感知する者がどのような「笑い」を好むかについても考慮するべきであるとし、「ユーモア志向」に着目した研究を行った。

「ユーモア志向」について因子分析を行った結果、第1因子として、楽しんで遊ぶ、たわいのない遊戯的なユーモアやユーモア刺激を好み、表出することに関する「遊戯的ユーモア志向」因子が見つかった。また、第2因子として、攻撃的なユーモアやユーモア刺激に対する好みや行動に関する「攻撃的ユーモア志向」因子が見つかった。この両因子から作成されたそれぞれの尺度間には相関が見られなかったことから、「ユーモア志向」には少なくとも2つの独立した側面があることが明らかになったと報告している⁵。

2-2. 牧野幸志の「ユーモア・センス」

上野（1993）の研究では、3つの「ユーモア」（攻撃的ユーモア、遊戯的ユーモア、支援的ユーモア）が見出されたにも関わらず、「ユーモア志向」では支援的ユーモアに関する態度が示されなかった。牧野（1997）はこの原因について、調査項目で上野が設定した「ユーモア刺激」が2種類しか含まれていなかったから（つまり、「支援的ユーモア」として受け止められるものが少なかったことを示唆している）であると指摘した。

さらに牧野は、「ユーモア」の表出や感知によるおもしろさの生起や楽しさは、状況に応じて自己や他者に支援的な機能を持つと考えるのが妥当であるとしている。確かに、元々「支援的ユーモア」が存在するというよりは、「遊戯的ユーモア」または「攻撃的ユーモア」が、受け手の心情や置かれている状況（境遇）によって、「支援的ユーモア」に転じると考える方が自然である。

母親が我が子の笑顔を見るのと、第三者がその子どもの笑顔を見るのとでは、笑顔の捉え方が違うであろうことは容易に想像できる。第三者に比べ、母親が子どもの笑顔から受ける支援的要素（「この子の笑顔を見るために私は頑張れる」「この子が笑ってくれるなら私は幸せだ」など）は大きいことだろう。

以上の考え方から、牧野は上野の「ユーモア」の3分類を改めて整理し、「ユーモア刺激」の性質（遊戯的・攻撃的）と支援的機能（あり・なし）の2次元で捉え直し、「ユーモア」を「送り手が受け手（ときには、送り手自身も含む）を楽しませるため作り出した刺激を受け手に伝達し、当事者（送り手かつ／あるいは受け手）がその刺激をおもしろい、おかしいと知覚する一連の過程」と定義した。

その上で牧野は、日常生活における「ユーモア」の効果を考慮する場合は、とりわ

け対人コミュニケーションについて観察し、実際に「(ユーモアを)使う、用いる、(人を)笑わせる、～して笑う、～をおもしろがる、～(ユーモア)を楽しむ」という行動レベルで捉える必要があると主張した⁶。

以上のことから、牧野(1999)は上野(1993)や牧野(1997)で示された「ユーモア刺激」の種類にそれぞれ対応する形で、「ユーモア・センス」尺度(16項目)を作成し、「ユーモア・センス」には攻撃的・遊戯的の2側面があることを明らかにした⁷。この尺度では、「ユーモア」を表出する能力と感知する能力の両方の観点を取り上げられているため、総合的な能力判断が可能になっている。

2-3. 青砥弘幸の「ユーモア能力」概念

青砥(2009)は、学校教育において学習者の「ユーモア性」の育成を目指した具体的な取り組みが実現されてこなかった背景を通し、「ユーモア性」は才能や人格特性として扱うのではなく、「ユーモア」に関する「能力」＝「ユーモア能力」(ユーモア創造力・ユーモア鑑賞力・ユーモア活用力)を育成するという発想に立つ必要があることを指摘した。また、学習者に「ユーモア」を正しく活用させるためには、やがては学習者自らが「ユーモア」を状況に応じて使い分けさせることを目標に、あらゆる「ユーモア」に触れさせ、その有効性と危険性の両面を教える必要があることも論じた⁸。

青砥(2011)は後に、「ユーモア活用力」の名称を「ユーモア判断力」と改めて、「ユーモア能力」の見取りを以下のように図で示している【Figure. 1】⁹。

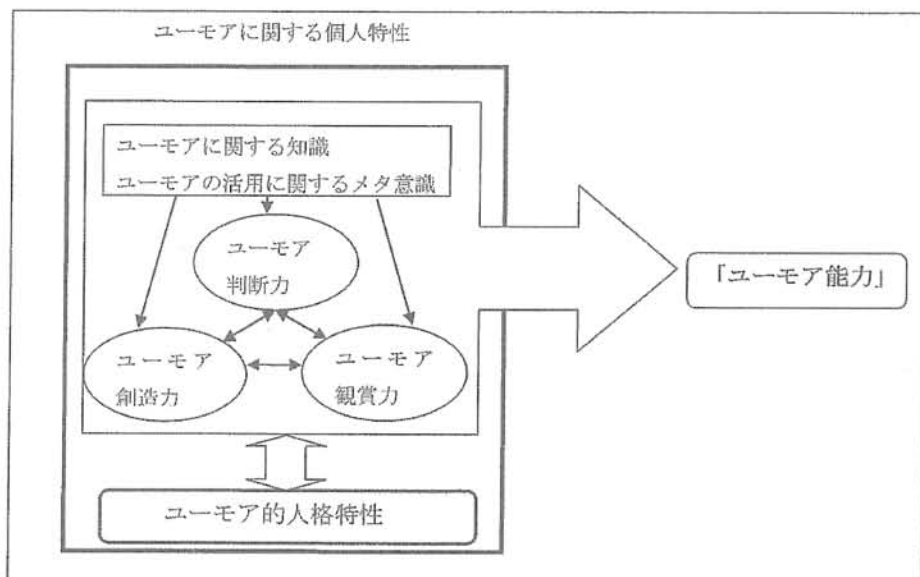


Figure. 1 青砥(2011)の「ユーモア能力」の見取り

「ユーモア能力」の下位概念について、青砥はまず、「ユーモア」に関する個人特性は、能力的側面と人格的側面の両面を持つものであるとし、それらが相互的に関わるものであると述べている。その上で、能力的側面の向上は人間性や社会性などの人格的側面の向上に繋がるため、「長期的な視野の中ではその教育目標を人間性や社会性の向上、全人教育の実現に見据えながらも、(中略)学習者の「ユーモア」に関連する「感覚」「能力」「技能」がその育成の対象として位置づけられるという方向性が、最も現実的で、有効な方法である」と主張する。

続いて、ジップ(A, Ziv, [高下訳], 1995)の提唱(「ユーモアおよびユーモアのセンスを研究するにあたっては、主要な二つの次元を考慮する必要がある。つまり、ユーモアを味わう能力〔ユーモアの鑑賞力〕とつくる能力〔ユーモアの創造力〕を区別して考えるのである。』¹⁰)を参考に、「ユーモア創造力」と「ユーモア鑑賞力」の2つを提示している¹¹。

その上で、青砥は海外の「ユーモア」研究の知見(主に国際ユーモア学会[ISHS]の見解)を参考に、母語教育(日本における国語科教育)において、“「ユーモア」を、その質や形態、場や状況などの観点から、その効果や適切性を正しく判断する”能力を位置づける必要があるとし、そのような能力として「ユーモア判断力」を置いている。そして、「ユーモア判断力」については、「「ユーモア」という現象に関する知識(「ユーモア」の社会的・心理的機能、可能性・危険性など)、自分の「ユーモア」に対する嗜好性に関するメタ知識、また自身の「ユーモア」との関わりをメタ的に見る視点が必要であると考え」と述べている¹²。

青砥の「ユーモア能力」の提案による功績は、それまで「ユーモア」が人格特性の面を主に扱われてきたことで、能力的側面が見過ごされてきたという経緯を指摘した点であろう。これにより、学習者の人格特性(人間性・社会性)の向上という目的をもって、「笑い」を学校教育に取り入れる(青砥でいう「教室ユーモア」の導入)意義を見出せたといえる。すなわち、「ユーモア能力」とは、人間性・社会性に通じる「ユーモア」に関する具体的なスキルであり、いわば社会的スキル(ソーシャル・スキル)に近い概念であると考えられる。

ただし、青砥が示した見取りは、あくまでも青砥自身の文献学的考察によって構成されたものであって、実際に「ユーモア能力」を構築する具体的な下位概念を、量的調査によって示したものではない。したがって、下位概念の緻密な検討については、尺度作成を量的調査によって試みる必要があるだろう。

2-4. 宇恵弘の「ユーモア測定尺度」

宇恵(2008)は、1990年から2000年の10年間、欧米における「ユーモア」研究で採用の頻度が多かったとされる5つの「ユーモア測定尺度」の長所を取り入れ、1つの尺度として統合し、新しい「ユーモア測定尺度」の作成を試みている。計576人の大

学生による3度の質問紙調査を経て、宇恵は「ユーモア測定尺度」の因子を①ユーモアの表出（意識）、②ユーモアの表出（態度）、③ユーモアのコーピング利用、④ユーモアへの気づき、⑤ユーモアに対する好悪の5つ（20項目）とした¹³。

この尺度を用いることにより、宇恵は「ユーモアの表現力、ユーモアの理解力、ユーモアの利用力の3つの側面が測定できる」と述べているが、その点については疑問が残る。例えば、「ユーモアの表現力」が「ユーモアの表出（意識）」と「ユーモアの表出（頻度）」の2因子8項目によって測定できるとしているが、前者の因子では、4項目中3項目が「〇〇だと思われています」や「〇〇だと言われます」など、周りからの評価（または自意識）を問う項目であり、意識のみで「表現力」を測定できるとは言い難い。

また、表現力を示すものもいくつか挙げられているものの、「だじゃれやゴロ合わせ」といった具体的な表現方法の提示は1項目のみで、その他は「人を笑わす話仕方」、「おもしろい動き」、「機転の利いたおもしろいこと」など抽象的なものであった。以上のことから、宇恵の尺度は「ユーモア」に対する態度を測定することはできたとしても、宇恵自身がいう3側面の能力（表現力、理解力、利用力）が測定できるかは懐疑的であり、項目中で「個人がどのようなスキルを持ち合わせているか」をより具体的に問う必要があるだろう。

2-5. 先行研究を踏まえた「ユーモア・スキル」研究の課題

これまでの考察を踏まえると、今後、「ユーモア・スキル」尺度作成のために検討すべき点は、次の4点であると考えられる。

- ①「ユーモア・スキル」の考え方については、青砥が示したように、人間性や社会性といった人格特性と相互に影響し合うものと位置付けることが妥当である。よって、人格特性に関わる能力（人間性・社会性）は、長期的にそれらを育成することを目的としながらも「ユーモア・スキル」として扱わないものとする。
- ②上野と牧野が示した「ユーモア志向」（好み）の問題は、送り手・受け手双方の「ユーモア・スキル」に影響を与えることから、青砥が「ユーモア能力」の見取りで示した「ユーモアの活用に関するメタ知識」に位置づけることができる。しかし、青砥の見取り図では、「ユーモアの活用に関するメタ知識」からその他の能力概念（「ユーモア創造力」、「ユーモア鑑賞力」、「ユーモア判断力」）へと一方向に矢印が向けられており、3つの能力が育成されることでメタ知識にも影響が及ぶといった見解ではないことが伺える。これについては、上野と牧野の先行研究によって得られた知見を支持し、青砥が示した一方向的な矢印は、双方向的なものに修正する必要があるだろう。
- ③先行研究から、「ユーモア・スキル」尺度の作成には、「ユーモア刺激」の認知に関わる能力【鑑賞力】、「ユーモア刺激」の表出に関わる2つの能力（ここでは【構

成力】と【表現力】に分けるものとする),「ユーモア志向」や知識に関わる能力(ここでは,「ユーモア」の知識や自分の志向性に対しての関心を表す態度として【ユーモア意欲】と呼ぶことにする),「ユーモア刺激」の表出および認知に重要な役割を果たす判断の側面に関わる能力【判断力】、「ユーモア・スキル」の社会的・心理的機能を脅かす外的要因の対処に関わる能力【コーピング力】の6つの能力概念が関わっている可能性がある。

- ④上野の「ユーモア志向」、牧野の「ユーモア・センス」、そして宇恵の「ユーモア測定尺度」は、あくまでも態度面を自己評価させるための尺度であり、青砥の「ユーモア能力」概念は提案に留まっている。したがって、実際のスキル面(行動面)をより自己評価させる尺度の作成が求められる。

以上を踏まえ、新たな尺度の作成を試みる。

3. 「ユーモア・スキル」尺度作成の試み

3-1. 予備調査

これまでの「ユーモア・スキル」研究では、志向性や態度の面が重視されていたため、本調査ではスキル(技術)を伴う行動面の項目抽出を重視した。その際、項目抽出を行う対象として、実際に「笑い」の技術に長けているとされる芸能従事者(お笑い芸人、落語家、作家等)が適切であると考えた。そこで予備調査では、若手・中堅(主に20代・30代)のお笑い芸人を中心としたアンケート調査を行い、それを基に尺度作成における項目の抽出を試みた。調査の方法・手続きは次の通りである。

調査期間 2014年4月1日～6月25日

対象 主に首都圏で活動する芸能従事者または経験者¹⁾124名。19歳から39歳

(芸歴1年以上20年未満)までの若手・中堅レベルの芸能従事者(男性88名、女性36名、平均年齢は26.1歳±12.9歳、平均活動期間は5年5か月)

活動形態の内訳は、1人(漫談、一人芝居)で活動するお笑い芸人が32名、2人(コンビ)で活動するお笑い芸人が81名、3人以上(トリオ、カルテット)で活動するお笑い芸人が5名、その他が6名(作家3名、落語家2名、舞台監督1名)であった。

実施内容

対象者全員に質問紙調査(直接の連絡が難しい対象者の場合はweb調査)を実施した。質問の内容は、以下の通りである。

「笑い」に関する芸能活動を通し、「人を笑わせるために必要なこと」または「人を笑わせるために努力すべきこと」は何だと思われますか。下欄に、思いついたものを1つずつ書いてください(最大10個)。

また、それが必要だと感じた理由についても教えてください。

質問の下段には、「人を笑わせるために必要なことまたは努力すべきこと」と「理由（任意）」を対にした記入欄を10枠分用意した。

手続き

予備調査の結果は、KJ法を利用して整理・分類した。

その結果、124名から回答数640（1人あたりの平均回答数5.2個）が得られ、集それらを集計したところ、最終的な項目数は239となった。これらを基にKJ法を利用して整理を行ったところ、「発想力」、「表現力」、「構成力」、「自己分析力」、「状況判断力」、「情報収集力」、「笑いへの関心」、「行動力」、「明朗性・余裕」、「熱意」、「勇気」、

No	グループ	項目 回答数	主な項目内容
1	発想力	43	意外性（オリジナリティー・独自性）想像力・共感性
2	表現力	81	大きな声を出すこと（声量）、豊かな表情・動き、リズム・テンポ、聞き取りやすい話し方、ボキャブラリー、ワードチョイス（言葉の選択）
3	構成力	33	論理的思考能力、起承転結つけて話す、常に他人に伝わるかを考える
4	自己分析力	50	アイデンティティの確立（自分の長所・短所を知る、自分の役割を考えるなど）自分をプロデュースする力、自分を客観視する力
5	状況判断力	31	人の反応を見る力、その場の空気を読む力、洞察力
6	情報収集力	51	日頃の情報収集（ニュースや新聞を見る）、一般知識の理解 アイデアや題材を探す力（メモをとる、人間観察をするなど）
7	笑いへの関心	31	笑いの勉強（ネタを見る、バラエティ番組を見る）
8	行動力	52	場数を踏む、趣味を持つ、色々な経験をする、スキルを磨く努力
9	明朗性・余裕	72	自分が楽しいと思うことをする、自分が笑顔でいる・元気である、自然体である、無理をしない、成功することの前向きさ、自己肯定感
10	熱意	32	やる気、あきらめない気持ち、人を楽しませよう・励まそうという心
11	勇気	37	恐れない心、度胸、傷つく覚悟、身を削る決意、恥を捨てること
12	人間力	82	社会人としての最低限のモラル・マナー、人（観客）への思いやりや配慮（人を傷つけたり、不快にさせないなど）、仲間を尊敬する、人柄、サービス精神、謙虚さ、常に感謝の気持ちを持つ
13	イメージ戦略	35	愛されるようになる、自然体を装う（必死さを見せない、「自分は面白い」ことを表に出さないなど）、華がある、外見・容姿（清潔感）
	その他	10	外的要因（運、人脈）、体格特性（身長、健康な体） 人生・境遇（生き様、苦勞、孤独） など

Table. 1 KJ法による項目グループ一覧表

「人間力」,「イメージ戦略」の13項目（その他を除く）が見出された【Table. 1】。

3-2. 1次調査

3-2-1. 1次調査の目的と方法・手続き

予備調査によって得た「ユーモア・スキル」尺度の66項目を用いて、大学生を対象とした質問紙調査を行い、因子分析および下位尺度間相関、そして性差・年齢差・地域差について検討した。なお、本調査は尺度の新たな作成を試みる目的から、コミュニケーション能力についてある程度の理解を有し、設問が多い質問紙を最後まで回答する一定の集中力を持つと思われる大学生を対象に行った。

調査期間 本調査は、2014年7月に行われた。

対象 都内の大学生（大学院生含む）246名（有効回答数238；男性89名・女性149名）で、全調査者の平均年齢は20.39（標準偏差〔SD〕1.30）歳であった。

なお、調査は学内の講義時間を利用して一斉に行われた。

尺度の使用 予備調査で新たに作成された「ユーモア・スキル」尺度（66項目）

手続き アンケートは匿名で行われたが、性差・年齢差・地域差を検討する目的から、性別・年齢・学年・出身地の4つは記入してもらった。尺度については、自分にその項目がどのくらい当てはまるかを5段階評定（5. よくあてはまる・4. だいたいあてはまる・3. どちらでもない・2. あまりあてはまらない・1. まったくあてはまらない）で回答してもらった。なお、調査の結果は、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

3-2-2. 1次調査の結果

まず、「ユーモア・スキル」尺度66項目の平均値、標準偏差を算出した。そして天井効果（平均値±SDの値が評定の最大値である5を上回ったもの）およびフロア効果（平均値±SDの値が評定の最小値である1を下回ったもの）の見られた7項目を以降の分析から除外した。

次に、残りの59項目に対して、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は10.33, 3.94, 3.18, 2.83, 2.12…というものであり、以降スクリー・プロットの傾きが穏やかであることから、4因子構造が妥当であると考えられた。

そこで、再度4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を【Table.2】に示す。なお、回転前の4因子で20項目の全分散を説明する割合は57.4%であった。

第1因子は7項目で構成されており、「人を笑わせる時にキャラクター（キャラ・個性）を演じることがある」、「大げさなりアクションをとって人を楽しませるのが好きだ」など、人を笑わせるための表現および積極性に関わる内容の項目が高い負荷量を示していたため、「表現力」因子と命名した。

項目内容	I	II	III	IV	
8. 人を笑わせる時にキャラクター（キャラ・個性）を演じることがある。	.78	-.08	-.04	-.01	
34. 普段から積極的に人を笑わせようとしている。	.74	.08	-.06	.05	
9. 大げさなアクションをとって人を楽しませることが好きだ。	.72	.01	.08	-.08	
33. テレビでお笑いタレントから話し方を参考にすることがある。	.69	.09	-.28	.11	
30. 人と話す時のために、自分自身の面白い体験談を準備している。	.61	.04	-.08	.07	
13. ユニークな顔や体の動きで人を笑わせることがある。	.59	-.03	.25	-.05	
1. 人と違ったことをして相手を楽しませようとするのが好きだ。	.56	.12	.23	-.11	
46. 失敗をしても、楽しいことを考えて気持ちを切り替えるようにしている。	.04	.70	-.09	-.02	
49. 落ち込んでいる人を見たら、その人が笑顔になるまで励まし続ける。	-.04	.70	.10	-.09	
50. どんなことも「楽しい」と思えるまで諦めないことが大事だ。	-.04	.68	-.18	.07	
47. 過去を振り返らず、今を前向きに楽しく生きたい。	-.06	.65	.09	.02	
43. 人と楽しく会話ができるように、自分自身がまずその会話を楽しむよう心がけている。	.07	.64	-.04	.00	
51. 人を笑わせる時、それが失敗してしまうことを想像してできなくなることもある。*	-.10	-.19	.71	-.15	
53. 人を笑わせようすると恥ずかしくなってできなくなる。*	.09	.08	.67	.02	
65. 人を笑わせようすると体に力が入って、相手の前で自然をよそおうことができなくなる。*	-.10	.04	.65	.06	
54. 大勢の人前に立つと、うまく話ができなくなることもある。*	.01	.00	.58	.21	
45. 相手がどう思うかを気にしてしまい、本音を言うことをためらってしまうことがある。*	-.03	.03	.50	.09	
15. 物事の順序を追って考えていくことが得意だ。	-.05	-.01	.09	.78	
14. 話をする時、内容を整理して話すことが得意だ。	-.03	.03	-.05	.74	
12. 語彙力（ボキャブラリー）が豊かだ。	.24	-.06	.04	.50	
(23. 常に人の反応を見ながら臨機応変に会話を行うことができる。)	(-.05)	(.04)	(-.02)	(.39)	
*は逆転項目	因子間相関	I	II	III	IV
項目23は参考値。ここでは因子として含めないものとする。	I	-	.52	.50	.36
	II		-	.34	.25
	III			-	.40
	IV				-

Table. 2 因子分析結果（1次・Promax回転後の因子パターン）

第2因子は5項目で構成されており、「過去を振り返らず、今を前向きに楽しく生きたい」、「失敗をしても、楽しいことを考えて気持ちを切り替えるようにしている」など、どのような状況にあっても明るく前向き（ポジティブ）に考えようとする項目が高い負荷量を示していたため、「創造的思考力」因子と命名した。

第3因子は5項目で構成されており、「人を笑わせようすると恥ずかしくなってできなくなる」（逆転項目）、「人を笑わせようすると体に力が入って、相手の前で自然をよそおうことができなくなる」（逆転項目）など、人を笑わせたり話したりする時に感じる緊張や不安に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。よって、緊張や不安によるプレッシャーを対処し、本来自分が持っているすべての力を発揮する能力、すなわち「コーピング力」因子と命名した。第3因子はすべて逆転項目である。

Table. 2 「ユーモア・センス」の下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数（1次）

	表現力	創造的思考力	コーピング力	論理構成力	平均	SD	α 係数
表現力	—	.42**	.44**	.35**	3.04	0.86	.86
創造的思考力		—	.27**	.41**	3.64	0.71	.80
コーピング力			—	.40**	2.81	0.73	.76
論理構成力				—	3.02	0.84	.74

**．相関係数は1%水準で有意(両側)。

第4因子は3項目で構成されており、「話をする時、内容を整理して話すことが得意だ」、「物事の順序を追って考えていくことが得意だ」など、論理を構成する上で必要な資質に関する内容の項目が高い負荷量を示していたため、「論理構成力」因子と命名した。ただし、項目23「常に人の反応を見ながら臨機応変に会話を行うことができる」については、負荷量が.39であったため、ここでは第4因子として含めず、2次調査の結果を見てから因子に入れることを検討することにした。

次に、「ユーモア・スキル」尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「表現力」下位尺度得点（平均3.04，SD 0.87）、「創造的思考力」下位尺度得点（平均3.64，SD 0.72）、「余裕」下位尺度得点（平均2.81，SD 0.74）、「論理構成力」下位尺度得点（平均3.02，SD 0.85）が得られた。

内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「表現力」で $\alpha = .86$ 、「創造的思考力」で $\alpha = .80$ 、「余裕」で $\alpha = .76$ 、「論理構成力」で $\alpha = .74$ と十分な値が得られた。また、「ユーモア・スキル」の下位尺度間相関については、4つの下位尺度で互いに弱・中程度の正の相関（.21から.44）が見られた【Table.2】。

3-3. 2次調査

3-3-1. 2次調査の目的と方法・手続き

1次調査によって得た「ユーモア・スキル」尺度の20（21）項目を用いて、大学生を対象とした質問紙調査を行い、尺度の信頼性・妥当性について検討した。ここでも1次調査と同様に、コミュニケーション能力についてある程度の理解を有し、設問が多い質問紙を最後まで回答する一定の集中力を持つと思われる大学生を対象に行った。

調査期間 本調査は、2014年7月に行われた。

対象 対象 都内の大学生（大学院生含む）251名（有効回答数245；男性82名・女性163名）で、全調査者の平均年齢は20.14（標準偏差〔SD〕1.25）歳であった。なお、調査は学内の講義時間を利用して一斉に行われた。

尺度の使用 まず、1次調査によって得られた「ユーモア・スキル」尺度20項目、「ユーモア・スキル」尺度中に入れるか否かを検討するための1項目を使用した。次に、基準関連妥当性を検討するために、藤本・大坊

(2007) によって作成されたコミュニケーション・スキル尺度「ENDCOREs」(24項目)を使用した¹⁵⁾。また、質問紙自体に含まれる逆転項目が少ない点を考慮してダミー項目(2項目)を追加した。以上、計47の項目で構成された質問紙調査を行った。

手続き 1次調査と同様に、性差・年齢差・地域差を検討する目的から、性別・年齢・学年・出身地の4つを匿名の上で記入してもらった。尺度については、自分にその項目がどのくらい当てはまるかを5段階評定で回答してもらった。なお、調査の結果は、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

項目内容	I	II	III	IV	
9. 大げさなリアクションをとって人を楽しませることが好きだ。	.81	.04	-.18	.00	
13. ユニークな顔や体の動きで人を笑わせることがある。	.80	-.05	-.08	-.01	
8. 人を笑わせる時にキャラクター（キャラ・個性）を演じることがある。	.77	-.05	.00	.00	
1. 人と違ったことをして相手を楽しませようとするのが好きだ。	.62	.02	.16	-.03	
33. テレビでお笑いタレントから話し方を参考にすることがある。	.60	.02	.18	-.16	
34. 普段から積極的に人を笑わせようとしている。	.60	.08	.01	.14	
30. 人と話す時のために、自分自身の面白い体験談を準備している。	.42	-.03	.26	-.03	
50. どんなことも「楽しい」と思えるまで諦めないことが大事だ。	.05	.71	-.16	-.16	
43. 人と楽しく会話ができるように、自分自身がまずその会話を楽しむよう心がけている。	.02	.67	.02	.10	
46. 失敗をしても、楽しいことを考えて気持ちを切り替えるようにしている。	-.12	.61	.07	.23	
47. 過去を振り返らず、今を前向きに楽しく生きたい。	-.08	.59	.09	.01	
49. 落ち込んでいる人を見たら、その人が笑顔になるまで励まし続ける。	.23	.43	-.06	-.12	
65. 人を笑わせようすると体に力が入って、相手の前で自然をよそおうことができなくなる。*	-.07	.09	.85	-.08	
51. 人を笑わせる時、それが失敗してしまうことを想像してできなくなることもある。*	-.03	-.00	.82	-.02	
53. 人を笑わせようすると恥ずかしくなってできなくなる。*	.20	.06	.74	-.13	
45. 相手がどう思うかを気にしてしまい、本音を言うことをためらってしまうことがある。*	-.15	-.10	.63	.08	
54. 大勢の人前に立つと、うまく話ができなくなることもある。*	.09	-.11	.59	.22	
15. 物事の順序を追って考えていくことが得意だ。	-.04	-.06	-.05	.75	
14. 話をする時、内容を整理して話すことが得意だ。	-.08	.08	-.03	.70	
12. 語彙力（ボキャブラリー）が豊かだ。	.13	-.10	.07	.55	
23. 常に人の反応を見ながら臨機応変に会話を行うことができる。	.15	.14	.07	.50	
*は逆転項目	因子間相関	I	II	III	IV
	I	-	.51	.36	.31
	II		-	.34	.26
	III			-	.26
	IV				-

Table. 3 因子分析結果(2次・Promax回転後の因子パターン)

Table. 4 「ユーモア・センス」の下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数（2次）

	表現力	創造的思考力	コーピング力	論理構成力	平均	SD	α 係数
表現力	—	.44**	.31**	.34**	3.22	0.76	.85
創造的思考力		—	.27**	.26**	3.79	0.62	.74
コーピング力			—	.24**	2.94	0.85	.84
論理構成力				—	3.17	0.65	.74

**、相関係数は1%水準で有意(両側)。

3-3-2. 2次調査の結果

まず、「ユーモア・スキル」尺度21項目の平均値、標準偏差を算出したところ、天井効果およびフロア効果を示すものは見られなかった。次に、全項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は5.97, 2.46, 2.06, 1.68, 0.97…というものであり、1次調査と同様、4因子構造が妥当であると考えられた。

そこで、再度4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を【Table.3】に示す。なお、回転前の4因子で21項目の全分散を説明する割合は57.9%であった。

Table. 5 男女別・年齢別・地域別の平均値とSDおよびt検定の結果（2次）

	男性 (N=83)		女性 (N=162)		t値
	平均	SD	平均	SD	
表現力	3.34	0.81	3.18	0.73	1.58
創造的思考力	3.82	0.61	3.71	0.48	1.28
コーピング力	3.09	0.94	2.87	0.80	1.96
論理構成力	3.34	0.62	3.08	0.65	3.08**

* $p < .05$, ** $p < .01$

※囲み字は1次調査と同様に有意な結果が得られたもの。

	低年齢群 (~20歳・N=96)		高年齢群 (21歳~・N=149)		t値
	平均	SD	平均	SD	
表現力	3.10	0.73	3.42	0.77	3.34***
創造的思考力	3.74	0.64	3.85	0.59	1.33
コーピング力	2.88	0.86	2.94	0.82	1.40
論理構成力	3.10	0.63	3.28	0.66	2.11*

* $p < .05$, ** $p < .01$

※囲み字は1次調査と同様に有意な結果が得られたもの。

	関西出身者 (N=59)		関西外出身者 (N=186)		t値
	平均	SD	平均	SD	
表現力	3.38	0.87	3.18	0.72	1.69
創造的思考力	3.96	0.66	3.73	0.61	2.53**
コーピング力	3.13	0.87	2.88	0.84	1.96*
論理構成力	3.17	0.75	3.17	0.62	0.12

* $p < .05$, ** $p < .01$

※囲み字は1次調査と同様に有意な結果が得られたもの。

下位尺度は1次調査と同様、第1因子が7項目で構成された「表現力」因子、第2因子が5項目で構成された「創造的思考力」因子、第3因子が5項目で構成された「コーピング力」因子となった。第4因子については、1次調査で負荷量が.39となり、項目に入れるか否かを検討していた項目23「常に人の反応を見ながら臨機応変に会話を行うことができる」の負荷量が.50であったため、第4因子を新たに4項目で構成された「論理構成力」とした。

次に、「ユーモア・スキル」尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「表現力」下位尺度得点（平均3.22, SD 0.76）,「創造的思考力」下位尺度得点（平均3.79, SD 0.62）,「余裕」下位尺度得点（平均2.94, SD 0.85）,「論理構成力」下位尺度得点（平均3.17, SD 0.65）が得られた。

内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「表現力」で $\alpha = .85$,「創造的思考力」で $\alpha = .74$,「余裕」で $\alpha = .84$,「論理構成力」で $\alpha = .74$ と十分な値が得られた。また、「ユーモア・スキル」の下位尺度間相関【Table.4】については、4つの下位尺度で互いに弱・中程度の正の相関（.24から.44）が見られた。

1次調査・2次調査によって得られた男女差・年齢差・地域差の結果については、2次調査の結果を中心に【Table.5】で示した。

まず、男女差を検討するために、「ユーモア・スキル」の各下位尺度得点について、

Table. 6 「ユーモア・スキル」尺度とENDCOREsの相関

	ENDCOREs					
	自己統制	表現力	読解力	自己主張	他者受容	関係調整
表現力	.14**	.28**	.21**	.27**	.32**	.34**
創造的思考力	.30**	.36**	.35**	.23**	.38**	.38**
コーピング力	.17**	.30**	.05**	.35**	.12**	.11**
論理構成力	.30**	.39**	.31**	.48**	.27**	.21**

** $p < .01$

Table.7 「ユーモア・スキル」尺度の高得点群・低得点群の

ENDCOREs平均値とSDおよび t 検定の結果

ENDCOREs	高得点群 (N=119)		低得点群 (N=126)		t値
	平均	SD	平均	SD	
全体	3.81	0.40	3.41	0.36	8.24***
自己統制	3.71	0.56	3.47	0.49	3.33**
表現力	3.45	0.69	2.89	0.60	6.83***
読解力	3.77	0.75	3.51	0.72	2.90**
自己主張	3.65	0.69	3.00	0.72	7.26***
他者受容	4.29	0.47	3.97	0.49	5.12***
関係調整	3.98	0.56	3.63	0.44	5.31***

** $p < .01$, *** $p < .001$

Table. 8 全体および男女別の重回帰分析結果

	全体 (N=245)	男性 (N=82)	女性 (N=163)
ユーモア・スキル	β (標準偏回帰係数)	β (標準偏回帰係数)	β (標準偏回帰係数)
表現力	.09***	.15***	.05***
創造的思考力	.33***	.38***	.33***
コーピング力	.08***	.02***	.10***
論理構成力	.37***	.38***	.35***
R^2	.41***	.48***	.37***

*** $p < .001$

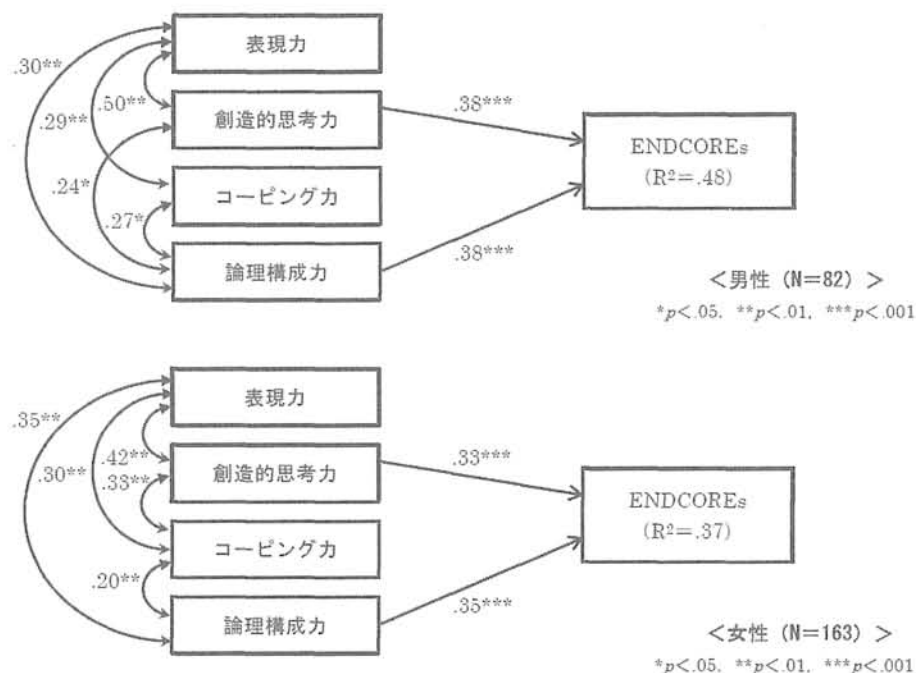


Figure. 2 男女別のパス図 (誤差変数は省略・有意なパスのみ)

得られた結果から検定を行った。その結果、両調査で女性よりも男性の方が、「論理構成力」下位尺度が有意に高い得点を示していたことが分かった。

次に年齢差の検討を行った。平均年齢を考慮し、20歳以下を低年齢群、21歳以上を高年齢群として検定を行った。その結果、両調査で低年齢群よりも高年齢群の方が、「表現力」下位尺度が有意に高い得点を示していたことが分かった。

最後に地域差の再検討を行うため、「笑い」の文化が日本でも根強い傾向にあるとされる関西出身者（ここでは大阪・兵庫・京都・滋賀・奈良・和歌山の2府4県とする）と、関西外出身者に分けて検定を試みた。その結果、両調査で関西外出身者に比べ関西出身者の方が、「コーピング力」下位尺度が有意に高い得点を示していたことが分かった。

「ユーモア・スキル」尺度の基準関連妥当性については、2次調査でENDCOREsを使用して検討した。ENDCOREsはコミュニケーション・スキルを6因子24項目に設定したものである。本来、「ユーモア・スキル」尺度作成の目的はコミュニケーション能力向上にあり、先行研究にあっても“「笑い」はコミュニケーションを円滑にする作用がある”ことが実証されてきた。よって、「ユーモア・スキル」尺度とENDCOREsそれぞれの得点には、正の相関があると考えられた。

まず、「ユーモア・スキル」尺度の得点と、ENDCOREsの得点との相関を検討したところ、「ユーモア・スキル」尺度全体の平均は2.97 (SD 0.47)、ENDCOREs全体の平均は3.60 (SD 0.42) で、中程度の正の相関が見られた ($r=.57$, $p<.01$)。

次に「ユーモア・スキル」とENDCOREsそれぞれの下位尺度の相関を【Table.6】に示す(藤本・大坊, 2007)。「ユーモア・スキル」の「表現力」下位尺度では、ENDCOREsの「自己統制」以外の下位尺度と正の相関が見られた。「創造的思考力」下位尺度では、ENDCOREsのすべての下位尺度と正の相関が見られた。「コーピング力」下位尺度では、ENDCOREsの「自己統制」、「表現力」、「自己主張」の下位尺度と正の相関が見られた。「論理構成力」下位尺度では、ENDCOREsのすべての下位尺度と正の相関が見られた。

次に、「ユーモア・スキル」尺度の高得点群・低得点群に分けて、ENDCOREsの得点差についてt検定を行った。その結果を【Table.7】に示す。高得点群・低得点群の分け方については、「ユーモア・スキル」全体の平均値 (2.97 [SD 0.47]) を考慮し、3.0点を超えた者を高得点群 (N=119)、3.0点に満たない者を低得点群 (N=126) とした。結果として、ENDCOREsすべての下位尺度で、低得点群に比べて、高得点群の方が有意に高い得点を示した。

【Table.6】を見ると、「創造的思考力」下位尺度と「論理構成力」下位尺度において、ENDCOREsのすべての下位尺度との有意な相関が見られた。このことから、「ユーモア・スキル」の中でもコミュニケーション能力に影響を与えるのは、「創造的思考力」と「論理構成力」であることが考えられる。

そこで、「ユーモア・スキル」の4つの下位尺度得点がENDCOREsに与える影響を検討するために、男女別に重回帰分析を行った。結果を【Table.8】に示す。また、重回帰分析に基づくパス図を【Figure.2】に示す。ここには、先ほど算出した「ユーモア・スキル」尺度の下位尺度間相関も示してある。全体 (N=245) および男性 (N=82)・女性 (N=163) すべてで、「創造的思考力」と「論理構成力」それぞれから、ENDCOREsに対する標準偏回帰係数が有意であった。結果から、男女ともに「ユーモア・スキル」の「創造的思考力」および「論理構成力」が高いほど、ENDCOREsの点数が高いことが明らかとなった。

3-4. 総合的考察

3-4-1. 男女差・年齢差・地域差

1次調査・2次調査ともに同様の結果が得られた部分については、有意な得点差・相関として考察することができるだろう。例えば、男女差では「論理構成力」下位尺度に有意な差があると考えられる。これは、女性よりも男性の方が、相手を笑わせる時に話す内容の構成を気にかける傾向があるといえる。

また年齢差では、1次調査を同様に、低年齢群（20歳以下）と高年齢群（21歳以上）との間で「表現力」下位尺度の有意な得点差が見られた。1次調査では「コーピング力」、2次調査では「論理構成力」の下位尺度得点にも有意な差が示されたが、結果に一貫性がないところを見ると、さほど関係がないと考えるのが妥当であろう。したがって、低年齢群と高年齢群との間では、「表現力」のみ有意な得点差が生じていることが示された。

ただし、1次調査の考察でも述べたように、低年齢群に比べて高年齢群の「表現力」が高い背景には、他の下位尺度との相関以外に、学年が上がることによる人間関係の変化が関係しているかもしれない。この点は、1次調査・2次調査のみでは判断できないため、今後の検討課題としておきたい。

地域差では、比較対象の人数差が大きいことと、関西出身者の人数が59名と少ないことが問題であったものの、関西出身者の下位尺度間相関が、互いに比較的高い正の相関が示されたという点は一貫していた。また、関西外出身者よりも関西出身者の方が「コーピング力」下位尺度の得点が有意に高いことも一貫していたが、 t 値が2を切っていることや対象人数が少ないことを踏まえると、一貫性が弱いと考えることが妥当だろう。

さらに、1次調査では有意な得点差ではなかったものの、関西出身者の得点が関西外出身者の得点をすべて上回っていたのに対して、2次調査では「論理構成力」下位尺度の得点に差がなかった。したがって本調査では、関西出身者と関西外出身者との間に、明確な得点差があるとは言い難い。

以上のことから、「ユーモア・スキル」尺度の男女差・年齢差・地域差については、以下の2点が示された。

- ①男性の方が女性に比べて「論理構成力」下位尺度が高い傾向にある。
- ②高年齢群の方が低年齢群に比べて「表現力」下位尺度が高い傾向にある。その背景には、年齢（学年）が上がることによって人間関係が変化（先輩の減少・後輩の増加・同級生または担当教員との親交の深まりなど）し、コミュニケーションをする上で心理的な余裕が生まれるからだと考えられる（ただし、大学生に限る）。

3-4-2. 「ユーモア・スキル」とコミュニケーション能力との関連性

「ユーモア・スキル」尺度とENDCOREsの相関の算出と、「ユーモア・スキル」の高得点群・低得点群による t 検定を行った。さらに「ユーモア・スキル」尺度がENDCOREsに与える影響を検討するために、重回帰分析を行った。

相関の算出結果については、「ユーモア・スキル」尺度とENDCOREsは中程度の正の相関にあり、ENDCOREsの各下位尺度とも概ね正の相関が見られた。また、有意な負の相関が見られなかったことから、「ユーモア・スキル」尺度がコミュニケーション・スキルに負の影響を及ぼす危険性は少ないことが示唆された。

なお、「ユーモア・スキル」尺度とENDCOREsとの間にある「表現力」の違いは、人を笑わせるまたは楽しませるための表現であるか否かである。その違いが、さほど高くない相関係数($r=.28, p<.01$)に示されたと考えられる。

t 検定の結果については、低得点群よりも高得点群の方が、ENDCOREsすべての下位尺度で有意に得点が高かった。また重回帰分析によって、「ユーモア・スキル」の「創造的思考力」と「論理構成力」が、コミュニケーション・スキルに直接的な影響を及ぼすことが明らかになった。

3-4-3. 「ユーモア・スキル」の信頼性・妥当性

1次調査・2次調査ともに、各下位尺度で α 係数が.70を超えていた(.74から.85)ため、信頼性は十分にあると考えられる。また、「ユーモア・スキル」尺度は、項目の負荷量が前後しながらも2次調査の因子構造と1次調査がほぼ同等の結果であったため、十分な因子的妥当性が認められたと考えられる。

さらに、「ユーモア・スキル」尺度とENDCOREsの相関係数では、全体で中程度の正の相関を示し($r=.57, p<.01$)、それぞれの下位尺度間相関でも負の相関も見られなかったことから、基準関連妥当性も確認できた。

4. まとめ—「ユーモア・スキル」尺度作成の今後の検討課題—

本研究では、「ユーモア・スキル」尺度作成およびコミュニケーション能力との関連性の検討を目的として行った。その結果、態度面と行動・スキル面の双方を兼ね備えた新たな尺度が完成し、信頼性・妥当性も十分にあり、コミュニケーション能力との関連が比較的高いことも確認された。

予備調査で抽出された項目には、「ユーモア志向性」や「ユーモアに対する好悪」を問うものもあったが、本研究の因子分析でそれらの項目は残らなかった。これは、「ユーモア・スキル」が優れた者が、あらゆる事物から「ユーモア」を感じ取ることができる人物であり、志向性の偏りなく、すべての「ユーモア」を理解する必要があるからだと考えられる。したがって本研究では、「ユーモア志向性」はスキルとして

取り込まれることなく、その人物のスキルに影響を与える人格特性的なものであることが示された。

コミュニケーション能力との関連では、「創造的思考力」と「論理構成力」がENDCOREsに直接的な影響を及ぼすことが明らかとなった。また、「ユーモア・スキル」の4つの下位尺度がそれぞれ概ね有意な正の相関にあることから、「表現力」と「コーピング力」も間接的に影響を与えることが示唆された。

本研究における最大の成果は、コミュニケーションにおいて「笑い」の重要性を知りながらも、その具体的な方略が何か分からなかったすべての人に、「ユーモア・スキル」を身に付けさせる足掛かりを与えたことである。また本研究の成果は、文部科学省が示した「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」を促すものであり、今後の研究で、教師および児童・生徒・学生のコミュニケーション能力に関する諸問題の解決を導く知見が得られると思われる。

ただし、「ユーモア・スキル」尺度については、いくつか課題が残されている。

まず、調査対象に関する課題である。本調査では芸能従事者から項目を抽出し、大学生を対象にアンケート調査を行ったが、教師および児童・生徒に同様のアンケート調査を行った場合、異なる結果や特徴が表れる可能性がある。加えて、児童・生徒にアンケート調査を行う場合、66項目すべての文面が、児童・生徒にも伝わる内容であるか（難しい内容ではないか、誤解を招く文章表現ではないかなど）を再考しなくてはいけないだろう。今後は、より多くの対象から調査を行う必要があるだろう。

また、調査人数と回数の課題も挙げられる。今回は1次調査で238名、2次調査で245名の有効回答を得て行われたが、今後、尺度の信頼性・妥当性をさらに高め、1次と2次で結果が一貫しなかったものについて検討するためにも、より多くの人々を対象に検討する必要がある。

次に、性差・年齢差・地域差の検討に関する課題である。本研究では250名前後の大学生という調査範囲に留まっており、それに伴って、性差・年齢差・地域差も部分的なものが示されたに過ぎない。今回得られた知見と作成された尺度を基に、様々な比較調査を行っていきたい。

本研究で作成された「ユーモア・スキル」尺度は、「笑い」によってコミュニケーション能力を間接的に向上させることが目的であって、すべての下位尺度でコミュニケーション能力を説明できるものではない。「ユーモア・スキル」尺度とコミュニケーション能力との関連性については、今後も検討していかなければならない。

最後に本研究では、人間関係や時期といった点は考察の対象に入れなかったが、対象が児童・生徒・学生の場合、年度の始め（前期）と終わり（後期）では周囲の環境や人間関係の変化が影響して、調査の時期によって得られる結果が異なる可能性がある。以上の点も考慮に入れ、検討を行っていきたい。

また、「ユーモア」の危険性についても考慮しなくてはならない。使用の意図やタ

イミングを介えず、むやみに人を笑わせようとすることは、コミュニケーションにおいて逆効果である可能性がある。したがって、「ユーモア・スキル」をコミュニケーションにおいて有効に適用させるためには、使用者が戦略的（どのように「ユーモア」を用いるか）に用いなくてはならない。戦略的に「ユーモア」を用いる能力とは、「ユーモア・スキル」の「論理構成力」下位尺度に相当する部分であるが、この点に注意してワークショップの運用を行う必要があるだろう。

今後の展望として、「ユーモア・スキル」を実際に適用し、コミュニケーション能力向上を目的としたワークショップ（ユーモア・トレーニング）の実施および効果の検討を行っていきたい。

注

- 1 「お笑い教師同盟」の詳しい活動内容については、<http://owarai-kyousi.com/> (2014.11.28現在) を参照。
- 2 詳しい内容については、それぞれのURLを参照。
 - ① ワークショップ1回目の模様：<http://yoshimotonews.laff.jp/news/2012/10/post-e943.html> (2014.11.28現在)
 - ② ワークショップ2回目の模様：<http://yoshimotonews.laff.jp/news/2012/10/post-e2bf.html> (2014.11.28現在)
 - ③ ワークショップ3回目の模様：<http://yoshimotonews.laff.jp/news/2012/10/post-10cf.html> (2014.11.28現在)
- 3 本稿では、「ユーモア」(人におかしみを抱かせる要素)を感じ取る能力概念を「ユーモア・スキル」と称するものとする。
- 4 上野行良 (1992)『ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について』社会心理学研究7 (2) 日本社会心理学会 pp.112-120
- 5 上野行良 (1993)『ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係』心理学研究64 (4) 日本心理学会 pp.247-254
- 6 牧野幸志 (1997)『ユーモア行動の構造に関する研究』広島大学教育学部紀要第一部心理学 (46) 広島大学教育学部 pp.41-48
- 7 牧野幸志 (1999)『説得に及ぼすユーモアの種類と量の効果 (2)』広島大学教育学部紀要第一部心理学 (48) 広島大学教育学部 pp.107-114
- 8 青砥弘幸 (2009)『学校教育における「ユーモア性」の育成に関する一考察—「ユーモア能力」という概念の提案—』笑い学研究 (16) 日本笑い学会 pp.59-67
- 9 青砥弘幸 (2011)『国語科教育改善のための「教室ユーモア」研究 (学位論文)』広島大学 p.98 (http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/diss/diss_ko5388.pdf) (2014.11.28

現在)

- 10 ジップ (A. Ziv; 高下保幸訳・1995)『ユーモアの心理学』 大修館書店 viii
- 11 青砥 (2011) 前掲書 p.97
- 12 同上書 p.100
- 13 宇恵弘 (2008)『ユーモア測定尺度の作成』 関西福祉科学大学紀要 (11) 関西福祉科学大学 pp.31-40
- 14 経験者とは、ここでは「過去芸能従事者として活動をしていて、現在は引退している人物」を指すものとする。
- 15 藤本学・大坊郁夫 (2007)『コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み』 パーソナリティ研究15 (3) 日本パーソナリティ心理学会 pp.347-361

藤本・大坊は、コミュニケーション・スキルに関する既存の尺度を構成する因子を分類することで、自己統制・表現力・読解力・自己主張・他者受容・関係調整の6カテゴリーを見出した。これら6因子を理論的に基本スキルと対人スキル、表出系、反応系、管理系に分類し、各スキルに4種類の下位概念を仮定した24項目の尺度 (ENDCOREs) を作成した。

*本稿は、矢島が執筆を担当し、全体の調整を大崎が行った。

- i 創価大学大学院文学研究科教育専攻教育学専修博士後期課程3年
- ii 創価大学教育学部教授

Relationship between the “laughter” and the communication skill

**—Based on the “humor skill” research to
both comedians and college students—**

Nobuo YAJIMA, Motoshi OSAKI

I’ve created the “humor skill” measure by hearing from both comedians and college students to make the relationship between the “laughter” and the communication skill clear through this research. This can measure one’s ability to make people laugh and enjoy subjectively.

Now we could find that the “humor skill” measure consists of 4 abilities; expression, thinking creatively, coping, and making logic. We also found 2 abilities; thinking creatively and making logic which effect the communication ability directly from using another measure “ENDCOREs”. This “humor skill” measure I created can prove the reliability and reasonability.

*This is an article written by Yajima and adjusted by Osaki.